

# 幕末における英学の発達について

—時代思潮を中心として—

清水 貞 助

## まえがき

これまでに英学発達についての研究は、地方的資料の発掘などに支えられて、熱心な地味な研究家の努力によって、すぐれた成果が発表されている。しかし、それはいずれも、文法、発音、辞書、翻訳、文学、教科書といった分野別の文献的研究である。私は幕末や維新の英学史に興味をもって、関係の書をあさっているうちに、英学とは何かという疑問を抱いた。

大槻玄沢は蘭学階梯において「蘭学トハ即チ和蘭ノ学問ト云フコトニテ阿蘭陀ノ学問ヲスルコトナリ」といっている。この説明を英学にあてはめると、英学は単に英語・英文学の習得・研究だけでなく、イギリスの自然科学、人文科学、社会科学を含むものである。そして、これは幕末の開成所などの課目から考えても明らかである。こういう意味での英学を科学史的にひとりで研究することは不可能であろう。歴史的な概念としての英学は諸科学の総計でなく、その総合と把握することができる。

本論は主としてこのような意味での幕末の英学を研究の対象としている。このような視点から幕末に、国内的な動きと国際的な動きとがからみあいつつ、政局があわただしく動いて行くなかで、洋学が次第に盛んになり、その歴史の流れの中で、英学がいかなる理由で洋学の首位を占めるにいたったかを歴史的に捉えようとするものである。

## 1. 英学の起源

英語学習の起源は1760年（宝暦10年）までさかのぼりうるともいわれるが、一般にはフェートン（Phaeton）号事件の翌年、すなわち1809年（文化6年）とされている。

文化5年8月15日、久しぶりにオランダの国旗を掲げた船が長崎に入港して来るので、オランダ商館員が小舟で出迎えると、その船の乗組員はオランダ人を人質にし、薪水食糧の補給を要求した。オランダ船を装ったのは、東洋貿易の独占をはかって来航したイギリスの軍艦フェートン号であった。

長崎奉行松平康英はやむなく、英艦の要求をいれたが責を負って自刃した。この事件は幕府に深刻な衝撃を与えた。幕府は海防と外国語、とくに英語研究の必要を痛感し、翌年2月長崎の通詞本木庄左衛門、末永甚左衛門、馬場為八郎、西吉衛門、吉雄忠次郎、馬場佐十郎の6名に英語の学習を命じた。指導にはオランダ商館副官ブロムホフ（Jan Cock Blomhoff）が当たった。これがわが国における公的な英語学習の初めである。

英語の学習はその後わが国の政策の変動とともにその盛衰を重ねたが、その学習の起源がわが国の危機打開のためであったことは、注目すべきことである。

## 2. 英語研究基本図書の発達

ことばの学習には辞書が必要である。特に日本語と全く語族を異にする英語を学習するには

辞書が必要である。そこで本木庄左衛門が編集主任となり、数名の通詞の協力を得て、1811年（文化8年）「暗厄<sup>アンタリヤ</sup>利亜語和解<sup>わけ</sup>」<sup>1)</sup>を著した。書名は内題には「暗厄<sup>アンタリヤ</sup>利亜語小<sup>せん</sup>筌」となっているが、「興学」とはわが国最初の英語の書名にいかにもふさわしい。この書物は10巻からなり、最初の3巻は単語集で、残り7巻は平常使用される語句、文章からなっていて、すべてに発音がしるされ、日本語訳がついている。発音にはオランダ語の影響が見られる。

幕府は続いて本木庄左衛門等通詞に英和辞典の編さんを命じた。その結果1814年（文化11年）に「暗厄<sup>アンタリヤ</sup>利亜語林大成」が完成された。これはわが国の最初の英和辞典である。語数は5,910で、発音は前書と同じように仮名で示しているが、次に示すようにオランダ語の影響があらわれている。

ト エバンドン ト エブレヒースト ト エボホル  
To abandon To abbreviate To abhor  
エフボット  
Abbot （「暗厄<sup>アンタリヤ</sup>利亜語林大成」）

両書とも発音仮名や訳語は縦書になっているが、上例では横書きにしてつづりと発音だけを示した。

両書とも写本であった。初期の英学書は皆写本であり、荒木氏の「日本英語学書志」などによれば、わが国で英学書が最初に印刷されたのは1857年（安政4年）であった。（21頁参照）

1818年（文政元年）にイギリスの両桅船ブラザーズ（Brothers）号が、1822年（文政5年）には捕鯨船サラセン（Saracen）号が浦賀に入港した。その時馬場佐十郎等が通訳をしたが、彼等はオランダ語を用いた。ブラザーズ号艦長ゴードン大佐は日本側の通訳について「1人はオランダ語に熟達し、1人はいくらかのロシア語を心得ていた。また彼らは兩人とも少し英語を話すことができた」<sup>2)</sup>と記している。馬場らが長崎でプロムホフから習った英語はまだ未熟で

あったらしい。

その後イギリス船はさかんに近海に出没して沿岸漁民に脅威を与えたので、幕府は1825年（文政8年）異国船打払令を出した。その結果英語研究は一時衰えた。しかし、英国の東洋進出はますます積極的になり、インドを完全に征服し、さらに1840年（天保11年）には阿片戦争で清国を破り、香港を獲得し、広東・上海など5港を開港させた。この事件はただちにわが国に伝えられたので、幕府や儒学者は非常な衝撃を受けた。幕府は外国との衝突を避けて、1842年（天保13年）さきの異国船打払令を緩和した。そのために英語研究熱が再燃した。

英語研究の再燃を象徴するかのようになり、1840、1841年（天保11、12年）にかけて、わが国最初の英文典である渋川六蔵（敬直）の「英文鑑」上下2冊が幕府に献上された。これは Lindley Murray の *English Grammar* の蘭訳からの重訳で、わが国でできた最初の英文法書である。この英文鑑に訳者がつけた漢文の序に、

英吉利国在西北洋中。而近出沒於我東海。來乞水薪炭數矣。又有其航海曆者。和蘭例所齎來。其語与文和蘭殊異。雖有諳厄利亜興學及語林大成等書。只能轉記其方言耳。未有論及其文法者。敬直竊憾焉。今拳將以備国防不虞之用。旁便於翻譯也。

とある。本書を訳した動機は国防のためである。「諳厄利亜語和解」の凡例には「不虞に備る一大の要務」とあり、「諳厄利亜語林大成」の叙中には「風波以外の警に備る」とあり、これら英学研究の初期の書にはいずれも国防のための著作であることが明記されている。「英文鑑」においては、かたわら翻訳にも便ならしめようとする文化的動機を述べているが、これとて軍事的知識を得るための翻訳ともとれる。当時幕府がいかに国防を焦眉の急とし、西洋式軍備充実に努力していたかが伺われる。この後嘉

永年間に幕命によって編纂された「エンゲレス語和解」および1859年中浜万次郎の「英米対話捷徑」がでるが、これについてはそれぞれ23頁、24頁を見られたい。

こうして英学は次第に台頭してきた。蘭学から英学への移行期を象徴するかのようには、蘭人初学者用英語入門書が1857年（安政4年）に2種類覆刻された。ともにファン・デル・ペイル（Van del Pijl）の著である。これに長崎版と大野版とがある。1860年（万延元年）には英訳名 *Familiar Method for Those Who Begin to Learn the English Language* という書名で蕃書調所から英文の部分だけ翻刻された。1865年（安政4年）には美作宇田川氏蔵梓として、Vergni 著の *Englesche Spraakkunst* が「英吉利文典」として出されている。これは簡単な蘭文英文典である。これらの出版は蘭学の根拠地長崎でも英学が優勢になったこと、大野や美作といった僻遠の地でも英学の研究が始められて来たことを示すものとして意義深い。

確実な年代は不明であるが、この頃出版された「伊吉利文典全」は、蘭学が全盛をきわめていた当時としては珍らしく全文英文である。わが国最初の英文英文典である。編集方法は初期英文典の特徴である問答法を採用している。この原本には *The Elementary Catechisms/English Grammar/London/Groombridge & Sons, Patervoster Row/Sold by all Booksellers/1850* と印刷されている。この文典は僅か64頁であるが、よくまとまっていたので、非常に流行し、明治に入っても版を重ねている。この文典の出現は蘭文典から英文典への移行が進んでいたこと、当時の学習者の英語力が、この文典を理解できるまでに向上していたことを示すものとして歴史的意義がある。これは万次郎が米国から持ち帰ったものを手塚律蔵、西周助が複製したも

のである。この文典はごくうすいものであったので「木の葉文典」と俗に呼ばれていたが、英学ばかりでなく、国文法発達の上にも大きな影響を与えている。

この文典が流行したので、1866年（慶応2年）足立梅景編述「英吉利文典字類」と翌年阿部友之進著「挿訳英吉利文典」というこの文典の学習書が出た。前者は「木の葉文典」を読むための字引ともいうべきものであり、後者は訳と発音をつけた独習書である。

わが国最初の辞書についてはすでに述べたが、名実ともに最初の英和辞書は、1862年（文久2年）に洋書調所から出された、堀達之助・堀越亀之助共編の「英和对訳袖珍辞書」である。この辞書は英語は活字で、訳語は木版で印刷されていた。洋書調所は翌年開成所と改称されたので、この辞書は「開成所辞書」として知られている。この辞書はピカード（H. Picard）の *A New Pocket Dictionary of the English-Dutch and Dutch-English Language*, 1843の再版を台本としたもので、語数はおよそ2万である。その後版を重ね、用紙の関係で厚くなったものは「枕辞書」といわれるほど大きなものであった。明治2年これに片仮名（後にウェブスター式）の発音をそえ、単語を少し加えて、全部活字にした、いわゆる「薩摩辞書」になって一般に行きわたった。この辞書が幕末および明治初期の英学の普及発達に対する貢献度はきわめて大きい。

和英辞典については29頁を見られたい。

### 3. 英学発達の功労者(1)

幕末のわが国の英学の発達は外圧に対抗する軍備という時勢の要求によるところが最も大きい。幕末に来日したアメリカ人宣教師、幕府が派遣した海外使節、留学生、密航者および漂流者で外国（特にアメリカ）から送り返され

たものなどに負うところも少くない。次に主なる漂流者について述べる。

### (1) 三浦<sup>あんじん</sup>按針

日本に來た最初のイギリス人ウィリアム・アダマス (William Adams, 1564—1620) は、オランダ船リーフデ号に乗り、豊後臼杵海岸に漂着し、徳川家康に重く用いられ、相州三浦郡逸見村に領地を与えられたので、三浦按針といわれた。按針とは水先案内のことである。

アダマスは家康に欧州の形勢、貿易の有利なことなどを説き、また持っていた海図によって航海の経路などを説明した。家康は外国の事情や海外貿易の必要なことと有望なことを知った。家康はアダマスから算術や幾何を学び、また彼に洋式帆船を建造させたりした。アダマスが家康をして英国文明を通して、世界に眼を開かせた功績は大きい。アダマスは日本人を妻にし、在留20年間、徳川氏のために種々の外交問題に関係し、1620年(元和6年)病歿した。逸見の塚山公園にある按針塚は、アダマス夫妻を祭ったものである。

### (2) マクドナルド

わが国の英学に貢献したアメリカ人の第1号はラナルド・マクドナルド (Ranald MacDonald, 1824—94) である。彼はアメリカのオレゴン (Oregon) 州の生まれであった。日米交渉が年とともにしげくならうとしている時であったので、失恋の痛手をいやしながら通訳になろうとして、アメリカの捕鯨船プリマス号に乗りこみ、北海道利尻沖に来て、ボートに乗り移り、故意にボートを転覆させ、漂流を装って1848年(嘉永元年)上陸し、幕府によって長崎に護送された。マクドナルドは多少学問もあったので、幕府は彼に長崎の通詞14名に英語を教えさせた。彼が教えたのは、翌年2月アメリカへ送還されるまでの約7カ月という短い期間であっ

たが、これはわが国の英語教育史上特筆大書すべき出来事であった。

これまでの英語の教師は外人といっても、プロムホフを始めオランダ人で、その発音はオランダ語的であり、また彼等にとっても外国語である英語の知識はけっして完全なものではなかった。native speaker であるマクドナルドの教えを受けて、最も得るところの大きかったのは発音であった。彼の教授法について重久篤太郎は月刊「十人」第二巻第二号の「日本英学の先駆ラナルド・マクドナルド」で、

……彼の門下生は一度に一人が英語を読むのが習慣であって、彼はその発音上の誤りを正し、日本語で出来るだけよく意味や文章の構造などについて説明した。門下生等は子音の発音が出来なかったらしく、例へばLの音を発音することが出来ないで皆rに発音した。だから彼の名を Ranardo MacDonald とLの音を皆強い喉音を出してrの音に発音してゐた。又マクドナルドは日本人の発音の癖としてi(短音i)か或はoが子音の終りに加へられることを語っている。そして日本人は母音に対しては何等の困難もなく円満な声で発音をなし、語尾のeやoeさへも発することに驚いている。通詞等は文法上の知識があり感受性も強かったのでその発音は不充分としても上達早く、マクドナルドにとって彼等に英語を教へることは愉快なことであつたに違ない。されば日本語を(よく)解しないマクドナルドが日本流の和蘭語をのみ少しく解する通詞に英語を教授することに如何に苦心し、如何に努力したかは充分推察することが出来る。

彼は断片的な単語以外日本語がわからなかった。ので、彼の教授法は今日のいわゆる Oral Method に類したものであつたろう。「マクドナルドはサムライ生徒の熱心さと覚えのよいのには大いに感心するばかりであつた。……彼は生徒たちとしげしげ英米の政体について語った。イギリス王国のほうは理解するのがやさしかったが、選挙で大統領を選ぶというアメリカのデモクラシーにはサムライたちも見當がつかなか

ったらしい。』<sup>3)</sup>

次に嘉永4年から7年(1851—4年)間に幕命によって編纂された「エンゲレス語辞書和解」は注意に価する。その発音・訳語・書き方など以前のものより進歩しており、発音はオランダ語流が訂正され、米国流に近いものとなっている。これはラナルド・マクドナルドに直接教授を受けた西吉兵衛(成量)、森山栄之助などが編纂に当たったからである。

### (3) ペリー

嘉永6年(1853年)6月米国東印度艦隊司令官ペリー(Mathew C. Perry, 1794—1858)は4隻の軍艦を率いて浦賀に来航し、通商を求めたが、幕府は翌年これに答える旨を伝えた。翌月、同様の目的でロシヤ艦隊が長崎に入港した。翌年ペリーは再び来航し、幕府と和親条約を結んだ。ペリーの第1回の来航の際の通訳には、オランダ通詞堀達之助が当り、<sup>4)</sup>第2回の来航の際にはオランダ通詞堀達之助、森山栄之助、本木昌造等<sup>5)</sup>がこれに当たった。米艦にはオランダ語の通訳が乗っていた。

伝うるところによれば米国船中に広島島の漂民倉蔵なる者あり、米国宣教師サミュエル・ウィリアム(Samuel William)に日本語を教えたものなれど、上陸後の罪を怖れて竟に上陸せず。又、我越後の漂民勇之助も乗船中にありて、英語を巧みにし、堀達之助は其の巧みなる英語に感心す。……此時、ペリリは通訳某に完全なるウェブスター辞書を与えたりと伝えらる。<sup>6)</sup>

当時漂流してアメリカに渡り、かなりの程度まで英語に熟達していたものがあったが、処罪を恐れて帰国しなかったものがあったのではなからうか。

ペリー来航の際に「江川坦庵(太郎左衛門)は、……部下の万次郎を通弁として随行することを願ったが、老中阿部伊勢守は許さなかった。これは水戸<sup>なりあき</sup>齊昭の反対によるものであった。阿部が江川に与えた手紙には、「万次郎が

スパイでないことは明らかであるが、アメリカ人がどう考えているかがわからない。船に乗りこんだら連れてゆかれるかもしれない。水戸老公も心配しているから、万次郎のことは見合せてらどうか」<sup>7)</sup>と述べている。

日本人で米国に漂流して、米国で英学を習い、帰国してわが国の英学の発達に貢献したものは多いが、そのうち最も有名なものは次に述べる中浜万次郎と彦蔵である。

### (4) 中浜万次郎

中浜万次郎(1827—1898)は土佐の小漁村の四男として生まれ、15歳の時出漁中暴風雨にあい、漂流し、米国船に救われて、船長ホイットフィールド(William H. Whitfield)の好意によって米国で教育を受け、約10年後1851年(嘉永4年)に送還され、土佐藩主の寵愛を受けたが、やがて幕府に召され、禄高300石で旗本の待遇を受けた。武士と平民との身分差の大きかった時に、一介の漁夫であった者が旗本に抜擢されたということは、「恐らく英学史上空前絶後の大出世であって、如何に幕府が英語の必要を感じていたかが分ると共に、万次郎の英語が如何に重大な役目を帯びていたかが分る。』<sup>8)</sup>しかし、ペリー来航の際には彼は実際は米国人の前には姿を見せず、隣りのへやで、英語と漢文で書かれたすべての書類に目を通し、訂正し、承認を与え、陰で活躍したといわれる。

その後彼は欧米へ派遣の使節に同行して、国際親善と文化の輸入に尽した。1860年(万延元年)第1回遣米使節団の通弁として渡米した際には福沢諭吉とともにウェブスター辞典を1冊ずつ買って帰った。「これが日本にウェブストルという字引の輸入第一番」<sup>9)</sup>と福翁自伝に出ている。この時兩人の買ってきたウェブスターは、のちに岩崎克己氏の研究によって、大辞典ではなく次のような抄略版であったことが明ら

かにされた。

N. Webster: *An explanatory and pronouncing dictionary of the English language. With synonyms. Abridged from the American dictionary of Noah Webster.* By William G. Webster, assisted by Chauncey A. Goodrich. With numerous useful tables. New York. Mason Brothers, 1850. 8°. 490 pp.<sup>10)</sup>

中浜万次郎はその後、薩摩・土佐の2藩に仕え、明治元年開成所中博士に任ぜられ、1870年(明治3年)大山巖に随って欧米を訪問し、米国では恩人 Whitfield を訪ねた。彼は外交上の公務あるいは測量・航海・その他科学書の翻訳に従事するかたわら英語を教えていた。彼の生きた英語の名声がいかに高かったかは、当時「共立学校」で数百名に英語を教えていた尺振八が彼の門下に入ったことでも察せられる。彼の門下生には尺振八、中村敬字、福沢諭吉、細川潤次郎、榎本武揚、箕作麟祥、大島圭介等後世に活躍した傑物が多かった。

彼は1859年(安政6年)に「英米対話捷徑」を著わした。これは単語のつづりに拘泥せず、アメリカの、多少なまりがあるが、かなり正しい発音を示している。

グーリ デイ シャアー  
Good day sir.  
善 日でござる

ハウ ズー ユー ズー シャアー  
How do you do sir?  
如何 平 君 安

アイ アム プロテ ウワエル  
I am pretty well.<sup>11)</sup>  
わたくしは ことのほか こゝろよひ

中浜万次郎について、注意すべきことは、上に述べたように、従来のオランダ語式に比べてかなり正しい発音を示したほかに、次に示すような漢文の読み方をまねた番号付解釈法を考案したことである。

キャン ユー スパーク エンゲレス  
Can you speak English?  
こたえるか あなた 言ひ いきりますことばを

ユ スパーク エンゲレス プロテ ウワエル  
You speak English pretty well.<sup>12)</sup>  
あなた 言ふ いきりますことばを 十分に よろしく

日英語の語順の著しく異なることを考えると、番号付解釈法は一つの便利な学習法で、当時の英学者がこぞってこれを模倣した。中等学校の教科書の虎の巻には大正時代まで採用されていた。少し長文の例を次に示そう。

7 4 5  
During the first two  
6 3 1 2  
days of my stay,  
8 12 11  
they treated me  
9 10 13  
very well, but  
14 26  
then, when a  
22 21 17  
cousin of theirs  
19 18 20  
who had arrived  
16 15 25  
from America was  
24 23 27  
with them, they be-  
32 31 30 29 28  
gun to treat me bad-  
-33- 44 46  
ly, so that I left  
45 42 43 41  
them two days before  
40 34 39  
the time, I intend-  
38 37 36  
ed to stay with  
35  
them.

私ノ逗留ノ初メノ二  
日ノ間彼等ハ甚ダ  
能ク私ヲ取扱ヒシ  
然シ然ル時ニ亜米  
利加カラ到着シタ  
リシ所ノ彼等ノ從  
姉妹ガ彼等ト有リ  
シ時ニ彼等ハ悪シ  
ク私ヲ取扱フ可ク  
始メシ其故ニ私ハ  
彼等ト留マル可ク  
企テシ時ノ前ニ日  
ニ私ハ彼等ヲ離レ  
シ<sup>13)</sup>

## (5) 彦 蔵

中浜万次郎とともに英学史に残るのは彦蔵である。彦蔵は1836年(天保7年)播州の漁家に生まれ、彼が13歳の時に江戸がよいの船に乗り、帰路遭難して、アメリカ船に救助され、アメリカで教育を受け、洗礼を受け、名も Joseph Heco と改め、アメリカ市民権を得、日系米人第1号となった。1859年(安政6年)ハリス(Townsend Harris, 1804—1878)の通訳官として帰国した。彼は時を得て日本人別(戸籍)に戻り、「亜国と日本の両国間に在って、両国の為に微力をいたし国報を報ぜんことを願うばかりなり。<sup>14)</sup>」と日本人にもどりたい悲願を持っていた。彼が幕府および米国との間にあって、領事館問題、外国使節との応待に重要な役割を務め、両国のために大いに尽すことがあったのもこの念願のあらわれであった。

彼はまたアメリカ大統領リンカンと会見し、

握手した唯一の日本人<sup>15)</sup>であり、長崎で桂小五郎(木戸孝允)、伊藤俊輔(伊藤博文)などに会って、アメリカの政治について話し、「人民の、人民による、人民のための政治」を説き、<sup>16)</sup> 彼等の考え方に大きな影響を与えたと考えられる。

彼は元治元年に横浜で「海外新聞」を発行し、新聞事業創始者として歴史的存在であるばかりでなく、1895年(明治28年)には英文「自叙伝」(*The Narrative of a Japanese*)<sup>17)</sup>を出版している。その「英文は平易な英文で、叙述は淡々として客観的である。もちろん彦蔵はその経歴、教養において、日本人の英文の双壁といわれる岡倉覚三、新渡戸稲造の高い格調とは比較すべくもないが、読みにくい文章ではない」<sup>18)</sup> 1例として漂流して27日めの11月24日の日記をあげてみよう。

On the morning of the 24th day of the month, the weather was fine and the sea calm. But about noon, the wind came up from the westward and increased in force. We noticed several sharks playing about our junk. Some of our men were afraid of them, but others said that they were sent especially by the god "Isobe" to Watch over our vessel's safety, since we had been praying to the god particularly. It is said that sharks are the servants of the aforesaid god.<sup>19)</sup>

#### 4. 幕府の洋学研究機関

わが国の洋学は1548年(天文18年)フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸し、キリスト教を布教した時にはじまる。キリスト教の普及はヨーロッパ文化に対してわが国民の目を開かせることになったが、その後幕府は1612年(慶長17年)キリスト教を禁止し、1641年(寛永18年)には貿易を長崎1港に限り、中国・オランダ以外の船の来航を禁止した。そのため、西洋諸科学、西洋事情に関する研究は長崎の出島のオラ

ンダ商館を通じて、オランダ語を介して行なわれ、そういう学問は蘭学と呼ばれた。蘭学は8代將軍吉宗以来隆盛になったが、医学をはじめ、たぶんに実用主義的色彩が強かった。また幕府の体制維持強化のための知識技術の習得という性格が強かった。

#### (1) 開成所

その後アメリカ・ロシア・イギリス・オランダ・フランス等欧米列強の圧力が強まるにつれて、軍備の充実が焦眉の急となり、蘭学の大規模な導入が必要となった。そこで幕府自らが一つの組織を設けてこれを強力に推進しなければならなかった。

幕府は1704年(宝永元年)に設けた天文台に1782年(天明2年)翻訳局をおいた。その翻訳局を洋学所と改称し、拡充を進めていたが、安政3年に蕃所調所と改称した。1862年(文久2年)には蕃書調所は更に洋書調所<sup>20)</sup>と改称された。

この調所は、流石に幕府の官学として、当時の最高のスタッフと設備とを整え、その研究のレベルは当時の最高の水準を行くものであった。これがわが国最初の官立外国語学校である。調所の任務は、当時緊要な洋書の翻訳であり、教育であり、また外交文書の翻訳処理であったが、さらに蘭学の統制監督もまた調所に課せられた任務であった。<sup>21)</sup>

蘭学は当時は科学としての優秀さと実用性のために、幕府の公学といった立場で発達し、普及していた。1856年(安政3年)

蕃書調所の創設にあたり、創立委員の勝麟太郎らが教官候補のリストを作った際、六九名<sup>22)</sup>がリストアップされている。これは、一応洋学者のトップ層を形成しているとみられる。そこで、洋学人材が正規分布をなし、リストアップされた六九名が、一・五σ(標準偏差)以上に位置づけられたトップ人材と仮定すると、1856年の洋学人材ス

トックは、約一〇〇〇人と推定できる。参考に象先堂<sup>23)</sup>と適々齊塾<sup>24)</sup>の姓名録によると門弟数は一〇四二人にのぼる。<sup>25)</sup>

調所は最初は蘭学を主に、英語を副として教授した。しかし、文化・文政にかけての英国船の近海への出沒、先進国として仰いでいた清国の阿片戦争における敗北、米国その他の国との通商条約締結後の外国との貿易に英語の必要度の増加などの理由で、英語の学習は焦眉の急となった。幕府は1857年(安政4年)頃から下田・函館・長崎・横浜などに通訳養成のために、英・米人について英語を学習せしめた。

また蘭学者の中でも英学に転向するものが現われた。蘭学を研究していた福沢諭吉が1859年(安政6年)横浜見物に行き、店の看板もビンのほり紙も読めなかったので、蘭学をやめ、英学に発心した<sup>26)</sup>話は有名である。幕府は翌年8月いよいよ外国語の必要に迫られ、布令を出して、外国語の稽古を一層奨励した。蕃書調所でもこの年6月から、英・仏・独・魯の諸国学科を置き、8月から従来蘭語が正科であったのをやめ、英語を正科とした。翌文久元年箕作貞一郎、千村五郎、竹原勇三郎等を、蕃書取調所の英学教師手伝並びに出役に命じ、ついで堀達之助を教授手伝に任じ、英学教授の端を開いた。

文久2年正月には蕃書取調所の英語教員を増員し、次のような陣容になった。

教授方 手塚律蔵、津田真一郎、西周助、堀達之助

手伝並 千村五郎、竹原勇四郎、箕作貞一郎

句読教授 高島大郎、竹原鎗次郎、田寺格之助、渡辺一郎、堀改蔵、朝夷金蔵、神谷弥作、大河内鉦太郎

世話心得 大岡芳之助、斎藤宗二郎、田中豊

三郎、福田松次郎、春田与八郎、外山捨八、竹原巾七、蘭鑑三郎<sup>27)</sup>

そして同年12月頃には「諸科稽古人日々凡そ百人程罷出候内英学之者六七十人有之」(開成所同等留)<sup>28)</sup>というように英学が非常に盛んになった。

取調所の設置の目的は軍事科学とともに、国産の増益に必要な科学技術の振興にあったので、語学的な翻訳・教授とともに精煉学・舎密学(筆者注化学)・物産学・数学等の研究が行なわれ始め、文久3年には「開成成務」の語から取って取調所を開成所と改称した。これは器械・精煉・物産を始め「天文地理百工之技芸」を総括する意味であった。蕃書調所—洋書調所—開成所と名称を変更して行なったことは当時の幕府の西洋科学に対する精神的態度の変化をあらわしているものであって興味深い。「1864年(元治元年)に開成所規則を改めて、課目を

和蘭学・英吉利学・仏蘭学・独乙学・魯西亜学・天文学・地理学・究理学・数学・物産学・精煉学・器械学・画学・活字学

に分けた。<sup>29)</sup>翌慶応元年には理学・舎密学・西洋地理学・西洋歴史、さらに同2年には星学・兵学を設けた。またこの頃西周・津田真道等によって法律・経済・哲学等が輸入されていた。こうして、開成所はきわめて広汎多岐にわたって洋学の研究・教育を行ない、全国洋学の最高学府であった。この頃蘭学はすでに衰え、英学が洋学の中で首位を占めていた。

## (2) 長崎の海軍伝習所

幕府の蘭学教育および研究の施設として、蕃書調所に匹敵するものに、1855年(安政2年)長崎奉行所に設けられた海軍伝習所がある。これはオランダの海軍将兵から海軍技術や医学の技術を学びとるためのものであった。これがわが国の近代海軍の建設や近代医学の発展



に果した役割は大きかったが、オランダはイギリスに気がねしてやがて講師を引きあげた。慶応3年イギリス海軍士官が来日し、築地に海軍伝習所を開き、以来海軍はイギリス式となった。

### (3) 長崎の英語伝習所その他

幕府は通訳養成のために1857年(安政4年)頃から下田・箱館(現在の函館)・長崎・神奈川で英・米人などについて英語を学ばせた。

そのうち最も規模の大きかったのは長崎の英語伝習所である。伝習所は1858年(安政5年)7月英人フレッチェル(Lachland Fletcher)およびオランダ人2名を教師とし、通詞榎林栄左衛門および西吉十郎の2人を頭取とした。外人が直接教授したので、西南諸国から来て学ぶ者が多かった。翌年オランダ生まれの米国宣教師フルベッキ(Guido Herman Fridolin Verbeck)が校長兼教師となった。1863年(文久3年)、長崎英語伝習所を同市立山に移して、「洋学所」と改称し、英・蘭・仏・魯および支那の5カ国語を講習せしめ、また数学を加えた。洋学所は後にまた「済美館」と改称した。

箱館に於ける英語教授は、通辯勘定格名村五八郎に命じて、公務の余暇を以て奉行所所属の子弟に教授して、通辯を養成せしめたのを起源とする。文久元年(1861年)5月には運上所構内に稽古所を設けた。(北海道廳編「北海道志」)<sup>30)</sup>

1861年(文久元年)、幕府は外国との交通上、洋学の必要を感じ、横浜野毛町に「修文館英学校」を創立し、本港に勤官吏の子弟および一般人の入学を許し、英漢仏語を教授した。本校は一名「洋学校」とも称し、慶応元年もとの弁天社内に移転したが、維新の際一時閉鎖した。

神奈川においては、翌年10月に今の本町5丁目の運上会所(海関)前に英学校を設け、石橋政方、太田源三郎、米国人宣教師ブラウン(Samuel Robbins Brown, 1810—80)などをそ

の教授とした。この学校は奉行所所属の子弟および附近の少年に英語を教え、一時なかなか盛んであったが、1866年(慶応2年)の大火で校舎が類焼し、廃校となった。

## 5. 諸藩の英学

藩費は藩主がその藩の子弟を教育するために作られた学校である。その教科は大体において昌平黉の教科にならったものであるが、藩によって、また時代の推移によって変動があった。次に各種の教科の追加された時代を示そう。

寛永—宝永 漢学、習字。

宝暦—安永 漢学、習字、皇学、医学。

天明—享和 漢学、習字、皇学、医学、算術、洋学。

文化—天保 漢学、習字、皇学、医学、算術、洋学、天文学、音楽<sup>31)</sup>

これによってみると、はじめ漢学と習字だけであったものが、次第に課目がふえ、幕末にいたって、外国との関係が切迫するにつれて、漸次洋学関係の課目が追加されて行った大体の推移発展のあとがわかる。

幕末に幕府が蘭学を奨励したので、諸藩もまたその政策にそって蘭学を奨励した。幕府はペリーの来航を画期として、従来の外圧への抵抗策を外圧への順応策に切換え、かつ物質文明の領域、特に軍事力強化の推進をはかった。

当時の英国の国際的地位、対米関係等から文化・技術・思想・外交・貿易すべての面で英語学習の必要が痛感されたので、幕府も諸藩も英語の教育に力を注いだ。次にその主なるものをあげよう。

薩摩藩では、藩の開成所設立後、1864年(元治元年)中浜万次郎を招いて、藩の子弟に軍艦練習および英語を教授せしめた。そして慶応年間には英学が首位を占めるにいたった。この英

学の隆盛は、薩英戦争以後の同藩の親英開国、富国強兵策、外国貿易、留学生派遣に関係がある。

佐賀藩の場合は、万延元年の遣米使節に参加した藩医川崎道民その他の体験と復命に基づいて、蘭学から英学への転向が始まった。また一方では英国式武器・兵器制の伝習によっても英学が盛んになった。とくに英学を促進したものは、外国貿易への進出であった。同藩の大隈八太郎・小出千之助は、貿易商を説得して出資せしめ、1867年（慶応3年）に長崎に英学塾（致遠館）を設けさせ、高潔な人格で信望のあったフルベッキを招いて英語・政治・経済・理学などを教えしめた。

その他の藩においても、この両藩の規模には及ばないが、英学が採用された。例えば岩瀬肥後守忠慶は1858年（安政5年）江戸向島の別墅で、英書の講読を開始し、1865年（慶応元年）11月膳所藩においても英語を課目に加え、翌年広島藩は洋学伝習所で英語を教授し始めた。年代は不明であるが、佐倉藩の成徳書院では、藩主堀田備中守正陸は幕末外交の衝に当たった開国論者で、「方今日新開化ノ際府下諸学校ノ如キハ公私共外国教師ヲ雇ヒ専ラ語学ヲ習ヒ文章手牘ヲ作ルコトヲ勤ム」<sup>32)</sup> 事情を見て、3年制の洋学校を作り、蘭学に、英学に、医学に、砲術に鋭意新式の学術を鼓吹した。<sup>33)</sup>

その他高知藩・福井藩・熊本藩・萩藩でも英学が次第に起っていた。

## 6. 私塾

英学の流行にともなって英学私塾の誕生も多くなった。維新前に設けられた主なるものは次の塾である。

英学塾：通詞森山多吉郎（改名、栄之助）が、1854年（安政元年）江戸小石川水道町に開

いたものである。森山はペリー来航の際に、通訳として江戸に召され、浦賀で日米交渉の主席通訳官として活躍した。英学に転向した福沢諭吉は、築地鉄砲洲から8キロ余の道を日夕この塾に通って英語を学んだという。

攻玉塾：1863年（文久3年）、鳥羽藩士近藤誠一郎（真琴）は幕府の軍艦操練所の学生であったが、四谷坂町の自宅に「攻玉塾」を開設し、蘭学・洋算および航海術を教えていたが、慶応2年から英語を教科に加えた。明治2年攻玉社と改称し、後攻玉社中学校となり、多くの海軍将校を世に送った。

慶応義塾：福沢諭吉（1835—1901）は緒方塾でオランダ語を学んだが、その学力が認められて、1858年（安政5年）中津藩侯に召されて江戸に出て、家塾を江戸鉄砲洲の奥平邸の長屋に開いて、希望者にオランダ語を教えはじめた。やがてオランダ語があまり通用せず、その実用がはるかに英語に及ばないことを経験し、英語を学び始め、1862年（文久2年）時勢の要求に応じて英学を主として教授し、わが国ではじめて、英米の原書を教科書とした。

1868年（慶応4年）その私塾を鉄砲洲の奥平邸から芝新銭座の旧有馬家中屋敷に新築して移転し、時の年号を採って慶応義塾と称した。それまでは塾名はなく、単に福沢塾、福沢の英学塾などといわれていた。義塾は共同結社の意味である。塾生は最初は100名ほどであったが、一時は上野戦争などのために、僅かに18名になってしまった。上野で官軍と彰義隊が戦っていて、上野の方に砲声が聞こえている時でも「上野と新銭座とは二里も離れていて鉄砲玉の飛んでくる気づかいはないというので、ちょうどあのとき私は英書で経済の講釈をしていました」<sup>34)</sup>と自伝にあるように、卓然として、1日も学業を休まず、熱心に西洋の新しい学説を講

義し続けた。戦乱が収まるにつれて塾生は急増し、明治の初期には日本の英学の中心となり、義塾の黄金時代を迎えた。

## 7. 英学発達の功労者(2)

英学の発達に貢献したひとびとのうち、漂流者についてはすでに述べたので、次に外国人、遣外使節、留学生などについて述べる。

### (1) ヘボン博士

ヘボン (James C. Hepburn, 1815—1911) は 1859 年 (安政 6 年) 夫人とともに神奈川に渡来し、当時はまだ公然とキリスト教を伝道することができなかったので、米国の神奈川駐在領事の斡旋で、一まず神奈川の成仏寺に居を定め、治療所を開いて貧病人の施療を始めた。当時は攘夷党の気焰当るべからざるものがあり、ヘボンの身辺も危険であったので、「米国公使館は急にヘボン氏は公使館付医者であり、ブラウン氏は公使館付牧師であると幕府に声明して漸く事なきをえた」<sup>35)</sup>とのことである。

幕末から維新にかけて来日し、異国において絶えず生命の危険にさらされたり、あるいはやるせない思いに耐えながら、日本の発展に尽くしてくれた彼等外国人には頭の下がる思いがする。また彼等が示した生活態度や日本に関する発言の中にも、今なおわれわれの心を打つものがある。ヘボンが来日以来満 8 年間にわたる学問的熱情と努力の結晶である「和英語林集成」

(一名平文辞書) は、1867 年 (慶応 3 年) に上海で印刷発行されたが、これはわが国文化史上の輝かしい名著で、「和英辞典史の臂頭に飾られる千古不磨の大金字塔である」<sup>36)</sup>といわれているように、近代日本文化史上の貴重な文化財である。その後も長くこれに匹敵しうるものは編集されず、日本人の英語学習および外国人の日本語学習に貢献した。

平文辞書の編纂とともにわれわれが忘れてならないのは、ヘボン式ローマ字の考案である。それにもまして日本の精神文化に大きな影響を与えたのは、ブラウン博士やヴァーベック博士の協力もえたが、前後 16 年の精励刻苦の結果完成した新約聖書と旧約聖書の翻訳である。1863 年 (文久 3 年) 横浜居留地 39 番地に新築の施療所が完成すると、もともと教育家であったヘボン夫人は、「ヘボン家塾」を開いて、男女の学生に英語を教授した。その男子部が後の築地大学 (現明治学院大学)、女子部が横浜のフェリス女学校のはじまりである。高橋是清、林董氏は夫人から洋学を修めたものである。

### (2) ブラウン博士

米国の宣教師ブラウンおよび米国医師シモンズ (D.B. Simmons,) はヘボンより 1 カ月半ほど遅れて神奈川に渡来し、ヘボンの仮寓に寄宿した。ブラウン氏は貧しい機械工の長男として生まれたので、苦勞をしてユニオン神学校を卒業した。頭脳はきわめて明晰で、また気品の備わった風格をしていた。ブラウン博士は口語体日本語という書物を著した。ブラウン博士は当時経済的に困難にしていたが、彼がいかに信望があったかは「横浜在住の英・米・蘭の公使館附文武官、および実業家達二十四名が一千五百弗の金を集めてブラウン氏に土地と建物とを寄贈したいと申込んで来た」<sup>37)</sup>事で察することができる。

ブラウン博士は集い寄る俊才に英学を教授するかたわら、聖書の和訳に励んでいたが、1868 年 (明治元年) 新築後間もない自宅が失火で焼失して、渡来後約 10 年間の丹精の結晶である日本語新約聖書の原稿はじめ、一切の家財を失ってしまった。相当の年配であったブラウン博士にとっては、これはかなりの打撃であつたらしく、また伝道の成果も思わしくなかったので、暫らく故郷で静養することになり、同年秋帰国した。

明治2年新潟英語学校長としてまた米国領事代理として再度来日した。しかし、新潟在住は僅か1年で再び横浜に来て、県立の修文館で英学を教授した。博士の徳を慕って新潟から修文館に入学した者が30名もあったとのことである。その後ブラウン塾を開設し、英学・神学を講じ、わが国キリスト教界に多くの逸才を送った。かたわら、聖書翻訳委員として、翻訳を完成し、明治12年帰国した。

### (3) 海外使節・留学生

徳川鎖国以後はほとんど文献のみを通じて西洋文明に接していたのであるが、西洋文明の現実を体験して、これをじゅうぶんに理解し、日本に移植し、日本の近代化を図ろうと考えたものが幕府や藩の中にもあり、明治になるまで約300人の海外使節や留学生が派遣された。

**第1回遣米使節：**幕府は1860年（万延元年）安政条約批准のため遣米使節を派遣したが、これは幕府の有力な役人に欧米文化の実態を見学させ、日本に一大改革を実行しようという開国主義者の閣老堀田<sup>まさよし</sup>正睦とハリスの深謀遠慮によるものであった。<sup>38)</sup>

正使は外国奉行新見豊前守正興、副使は同じく村垣淡路守範正、監察は目付小栗豊後守忠順で、一行77人は米艦ポーハタン号に乗り込み、1月18日品川沖を出航した。幕府は別に軍艦威臨丸を使節の護衛艦として、サンフランシスコまで航行させた。同艦の一行は軍艦奉行木村摂津守嘉毅、艦長勝麟太郎、乗員90人余で、通訳として中浜万次郎、木村の従者として福沢諭吉がその中にいた。威臨丸は1月13日出航、5月5日帰国した。村垣淡路守の「航海日記」は当時のサムライ階級の対外認識の程度がよくあらわれていてまことに興味深い。コンGRES（国会議事堂）を見学して、議員の演説を聞き、

そのうち一人立ちて大音声に罵り、手真似など

して狂人の如し。何か言い終りて、また一人立ちて前の如し。何事なるやと問いければ、国事は衆議し、おのおの意中を残さず建白せしを副統領聞いて決するよし。……国政のやんごとなき評議なれど、例のものも引掛筒袖にて、大音にて罵るさま、副統領の高き所に居る体など、我日本橋の魚市のさまによく似たり、とひそかに語り合いたり。<sup>39)</sup>

と述べている。もし、日本の現在の国会の乱闘など見たら淡路守はどう感ずるだろうか。中浜と福沢がウェブスター辞書を1冊ずつ買ったことはすでに述べたが、中浜はその他に写真機とミシンと機械書2冊をも求め、医官牧山修郷はエラスム著の英文「解剖書」を買って帰ったとのことである。

**第2回遣欧使節：**幕府は1861年（文久元年）外国奉行竹内下野守保徳を正使、松平石見守康直を副使として使節を欧州諸国に遣わし、両都両港（江戸・大阪・兵庫・新潟）の開市開港延期の諒解を求むるとともに、英仏諸国に聘礼を修めしめた。一行30余人は12月22日英艦オーデン（Odin）号で江戸湾を出航した。一行中には福沢諭吉、寺島宗則、福地源一郎、尺振八などが参加していた。約1年後開市開港を5年延期する妥協を成立させて帰国した。

一行はホンコン・シンガポール・スエズ・カイロ・マルセーユ・リオン・パリ・ロンドン・オランダ・プロシヤ・ロシヤ・パリ・ポルトガルと船や汽車を使って1年にわたる旅行で、苦勞も多かったろうが、得るところも多かっただろう。福沢はロンドン滞在中英書ばかり買っていたと自伝でいっている。これが英書輸入の始まりである。

一行はこの時も「いずれも日本服に大小を横たえてパリ、ロンドンを闊歩したもおかしい」<sup>40)</sup>とあるが、一行の失策談は限りなかったと想像される。

**第3回遣仏使節：**幕府が、1863年（文久3

年) 外国奉行筑後守長発等33名を、フランスと横浜鎖港と下関砲撃の際のフランス軍艦に対する賠償問題等について交渉するため、フランスの勧めに応じて派遣したが、彼等は目的を果さず帰国し、かえって鎖国の不可、公使の派遣、留学生の派遣の必要などを復命したために、減禄・蟄居を命ぜられた。通弁として西吉十郎、塩田三郎、尺振八等が同行した。この時池田長発等は数十種の洋書を購入して来た。そのうちの33種は現に東京大学資料編纂所に保存されている。

**第4回遣英使節**：1865年(慶応元年) 幕府は、外国奉行柴田日向守剛中を特命理事官として、英仏に派遣し、横須賀造船所および横浜製鉄所の設立について交渉せしめた。その結果、翌年、両方とも建設がはじまった。通弁には福地源一郎、西周、津田真一郎等が当たった。

**第5回遣露使節**：1866年(慶応2年) 外国奉行小出秀実等をロシアに派遣、樺太の境界を協議せしめた。

**第6回遣米使節**：1866年(慶応2年) 11月14日幕府は勘定奉行小野友五郎を正使とした使節をかねて購入の約束をしてあった軍艦の受取代金支払およびその他物品購入のため米国へ派遣した。通訳として尺振八、福沢諭吉、津田仙などがこれに従った。福沢諭吉は米国にて辞書を初め、地理・歴史・法律・経済・数学などに関する原書および欧文の教科書を資力を尽して購入した。そのうち主なるものはウェブスター辞書、カッケンボスおよびチャンバーの物理書、ウェーランドの倫理および経済書、テーラーの万国史、ピンノックの仏国史、カッケンボスの米国史、チャンバーの百科辞書、パーレーの万国史などであった。当時ウェブスターの辞書は1部24～5両であったという。

**第7回遣米使節**：翌慶応3年正月23日昨年注

文した軍艦受取および書籍購入のため小野友五郎等一行は米艦コロラド号にて米国に行き、軍艦を受取り、六月下旬帰国した。この際の通訳として随行した者の名は不明である。

#### (4) 留 学 生

外圧に対抗するために、幕府は富国強兵策、特に軍事力の増強に非常な努力をした。開成所や長崎の海軍伝習所の教育が、この幕府の政策に寄与するところは大きなものがあった。幕府はわが国の近代化推進のために、西洋の知識技術を身につけたすぐれた指導者養成の必要を感じた。そのために、身分にかかわらず、有能な人材を先進国に留学せしめ、先進国の物質文明を直接体験せしむる方法をとった。

**オランダ留学生**：幕府は1861年(文久2年)、前年11月米国へ留学させることに決定していた内田恒次郎、榎本釜次郎等を、米国が南北戦争中であつたために、オランダに留学させた。総員15名であつたが、士分の者のほかに技術職工ならびに従者6名も含まれていた。榎本等留学生は5年間留学し、1867年に帰国した。その技術工の中にわが国で最初の懐中時計を作った大野規周がいた。

**ロシア留学生**：1865年(慶応元年) 幕府はロシアの箱館駐在の魯国領事ゴシュケヴィッチ(J. Goshkevich)の勧めによって、開成所の学生および箱館奉行所の吏員から6名を選んでロシアに留学させた。留学生は山内作左衛門、市川文吉、小沢清次郎、大槻彦五郎、田中次郎、緒方城次郎の6名であつた。彼等は2年ないし8年留学した。

1866年(慶応2年) 幕府は3,000石以上の者に、英仏両国へ留学することを許可した。

**英国留学生**：同年幕府は開成所から中村敬輔(敬字)、箕作奎吾、外山正一、菊池大麓、川路太郎、林董<sup>ただす</sup>など14名を選んで英国に留学さ

せた。80名ばかりの志願者から試験で選抜された俊才で、大部分が20歳未満であった。最年長中村敬輔は35歳で、23歳の川路太郎とともに留学生の取締を命ぜられた。彼等は途中英国が東洋・地中海の要所をことごとく占有していることに驚き、ロンドンに着いてはエレベーターや真昼の如く夜の街を照らすガス灯に驚嘆したことが川路の「英航日録」に記されている。彼等は教師ロイドの家で猛勉強をしていたが、幕府が倒れて送金が絶えたので、慶応4年6月25日横浜に帰ってきた。「その時一行の頭髪はすでにみな散切頭であったから、そのままの姿で江戸に入れば、浪士たちのテロに襲われることは必至と危惧された。そこでやむなく、つけまげなどして江戸へ帰ったという」<sup>41)</sup>

中村は英国が世界の最強国になったのは、英国国民の自主自立にあることとさとり、その後「西国立志伝」を訳し、明治のベスト・セラーになった。

**長州藩の英国留学生：**以上は幕府公式の留学生であったが、諸藩の中でも公式にあるいはひそかに藩の使節や留学生を海外に送り出しているものもあった。例えば長州藩では、尊皇攘夷が激しく、1863年(文久3年)5月、6月にわたって下関海峡を通過するアメリカ、フランス、オランダの艦船を砲撃したが、藩政府の重鎮であった周布政之助、村田蔵六(大村益次郎)等は、到底勝算のないことを悟り、将来に備えて、伊藤俊助(博文)、志道聞太(井上馨)、野村弥吉(井上勝)、遠藤謹助、山尾庸三の5名を、外国艦船砲撃で藩論が沸騰しているさなかの5月12日に国禁を犯して英国へ送った。

ところが井上と伊藤は、在英半年ばかりで突然帰国した。2人の留学の意図は、海軍の技術を研究して攘夷の手段とすることにあつたが、まばゆいばかりのイギリスの文明に接して、攘

夷論は太陽のまへの朝霧のように消え去ったのであった。彼等を英国へ送ったのは同藩士村田清風と極東におけるイギリスの最大の商会であるジャーディン・マジソン商会であった。<sup>42)</sup> この2人はこの後もイギリスと連絡をとりながら、長州藩を開国主義に向わした。

**薩摩藩の英国留学生：**この頃薩摩藩では富国強兵が藩の方針であつたが、この富国強兵の手段を具体的に論じたのは、のちの大政商五代才助(友厚)であつた。彼は貿易商で、世界の大勢にも通じていた。薩摩藩には、1862年(文久2年)遣欧使節に随行し、攘夷の不可能を知りぬいていた松木弘安(寺島宗則)がいた。1863年(文久3年)イギリス艦隊の砲撃にあい、鹿児島市の大半を焼かれ、賠償金をとられてから、五代、松木などの奔走によって、藩論は開国に傾き、イギリスへの接近が顕著になった。

そして1865年(慶応元年)3月幕府の禁令を破って、家老新納<sup>にいろうぶ</sup>刑部および五代友厚は藩士寺島宗則、森有礼、畠山義成、町田久成、鯨島尚信、吉田清成など総勢19名をひそかにイギリスに留学せしめた。五代等は藩命によって各種紡績機械の購入、技師の招聘契約などに成功し、翌年から鹿児島紡績所が操業を開始し、工業の近代化をはかった。

この他に個人で密出国した者もある。その代表的人物は上州安中藩士新島襄である。新島襄は21歳の時、英国商館員福士宇之吉の周旋によって、1864年(元治元年)6月14日夜半函館港からアメリカ船で日本を脱出した。新島は海軍伝習所に入って測量・航海術を学び、杉田玄端について蘭学を学び、ついで函館に来て、外人について英語を学んだが、キリスト教の研究のため渡米した。彼は翌年8月ボストンに着き、米人ハーディの厚意によってアーモスト大学を卒業し、さらにアンドヴァー神学校を卒業するこ

とができた。

新島が密航後はじめて日本の官吏（森有礼公使）と接するのは明治4年で、日本を密出国してから7年目であった。森はすでに述べたように薩摩藩の英国への密留学生であったので、新島に理解を示し、また日本教育界において彼に期待するところがあったので、彼を日本の留学生として、おりから視察のためアメリカを訪れていた岩倉具視一行の案内役として、アメリカ・ヨーロッパ各地をまわらしめた。その時新島は桂小五郎、木戸孝允に近づきになった。案内役を果たしてアメリカに戻った。帰国に先だち「善美なる学校」を開設する宿願を訴えて、有志から5,000ドルの喜捨を得、それを資金として明治8年同志社英学校（同志社大学の前身）を開設した。その後再び欧米を歴遊し、帰国後教育と伝導に尽力した。

明治新政府になると海外留学生の総引揚げを行なったが、明治初年の留学生は米国の約100名を筆頭に約200名いたとのことである。

## 8. 幕末における英学の内容と意義

ペルリーの来航以来、アメリカ船およびイギリス船の近海への出沒がはげしくなるにつれて、通訳養成のために英・米人などについて英語の学習が行なわれた。外圧がはげしくなるにつれて、外交上、貿易上、軍備増強上、英学の内容も向上し、また次第に分化し、その含む領域も拡大し、自然科学部門以外に人文・社会科学にまで及んだ。またそのような学術を生んだ西洋国家・社会研究への要求が出てくるのも自然の勢いである。

福沢諭吉の英・米において購入した書物が多方面にわたっていること、長州藩の英国留学生の遠藤謹助は経済学および貨幣鑄造学を学び、野村弥吉は鉄道を、山尾庸三は工学・造船術を

研究したこと、慶応年間中だけでも英文の原書から、英国斯氏築城典型（5巻）、堡障略説、雷銃操法、英国歩兵練法、博物通論、自然科学入門、植物学（8巻）などの翻訳が出版されていることなどで当時の英学の一斑を知ることができる。

また蕃書とか攘夷とかのことばが示すように、欧米諸国は実用面においては日本に優っていても、精神的においてははるかに劣ると信じていた。ところが、遣米・遣欧使節や欧米への留学生は西欧文化が全面的に優秀であることを見聞し、西欧の近代社会そのものに対する認識を改めなければならなかった。例えば福島義言は航米日記で「此度我朝の人来る者総て七十七人なり、大抵半は皆彼を惡むものなり、然りと雖も其實を知に及ては人皆前非を悔ひ夢のさめたるが如し、若異人をして犬の如く賤め、非人の如く輕しむる時は彼に不仁無礼の名を受る、愚の甚しきにあらずや」<sup>43)</sup>と述べている。

幕府の公学である朱子学の性格は、社会の身分秩序を「自然的秩序」として是認するものである。秩序の静的な調和を前提としていた。未来は過去と連続している。したがって、幕藩体制のイデオロギーとしてはまことに好都合であった。しかるに、「洋学は事実の中に真理を見出し、真実のつかさねから未来が構成される。」<sup>44)</sup>という反体制的性格であった。

ところが、幕藩体制の内外外的危機の深まりは、この難局を乗り切るために、国家に有用な人材を、身分差を越えて社会の各層から広く求めなければならなかった。幕藩の教育目的が士族に対する教養主義から、社会に有用な人材育成に変わるにつれて、教育内容も儒学から軍事科学を中心とした実学的な洋学に変化していった。

洋学を公学として採用することは、幕藩にとっては指導原理の変更を意味することで、為政

者の勇気と決断を要することであった。また身分の枠を越えて広く人材を求めることは、教育の機会均等という近代化へ方向づけをしたものである。広く人材を社会の各層から求めるといっても、現実には下級士族までで、一般庶民にまでは及ばなかった。士族は農工商に対する特権階級であったが、士族の内部にも厳重な身分差があって、上級士族と下級士族との間には、士族と農工商との間ほどの身分差があり、家格と職務の世襲制が強かった。学問で優秀な成績をあげれば、支配機構の中に入ることができるようになったことは、下級武士に希望を与え、藩学その他の教育機関に子弟をかりたてる大きな誘因となった。いわば、学歴主義が台頭して来たのである。

さて、当時の洋学は、科学としての洋学一次第に英学を中心として一であった。開成所を中心とする洋学者は、富国強兵の政策から殖産興業、軍事に関するものを中心に研究したが、先進諸国の政治・工業・経済等についても、当時としてはきわめてすぐれた高度の知識・技術を持っていた。従って観念的、思想的には進歩的、近代的であり、開国論者であったにもかかわらず、政治的には無関心を装う立場をとっていた。彼等は支配層に属するいわば「頭脳」であり、技術者であって、幕府の体制を維持しつつ開国を行なうことを是認していた。父の不運な生涯を憤って「門閥制度は親のかたきでござる」<sup>45)</sup>とまで公言した福沢諭吉でさえ、攘夷論の盛んな幕末には「恐ろしいものは暗殺が第一番である」<sup>46)</sup>といって夜分は一切外出しなかった。こういう時代であるから、幕府に対する批判的なことばを、当時の洋学者の著作から見出すことは困難である。洋学者の立場、当時の殺伐な世相から、彼等の国内政治に対する意見が対外策に比較して、微温的であったのは、彼等が

支配階級の一員であり、一般庶民に対して依然として階級観念を持っていたためであろう。

しかし、新政府になり、治安も確立してくると情勢は変わった。福沢諭吉は、主従関係でこり固まっている日本人に「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」という有名な警鐘を鳴らし、また多くの先覚者は、自由民権運動を推進した。その源流は、マクドナルドが長崎奉行に「わがアメリカ合衆国で一番上に立つのは人民(ピープル)である」<sup>47)</sup>というわが国の近代化に画期的なことばや、彦蔵が木戸や井上にて下関でアメリカの民主政治を説いたこと、遣米・遣英使節・留学生の人間の平等・民主政治についての体験的開眼等に求めることができるであろう。

幕末の複雑な政治情勢、とくに幕府と反幕諸藩の対立、その間にフランスが幕権振興に加担し、幕府権力の強化をはかり、陸軍の教育を援助し、大藩を押えようとした。一方英国は、薩英戦争、外国艦船攻撃の経験から資本主義列国の軍事力に到底対抗できないことをさと、開国主義に転じた薩長をひそかに支持し、留学生を受け入れたり、近代工業施設の設立・操業を指導したり、貿易を助成したりした。また時の公使パークスは英国の理想とする「平和革命」の実現のため舞台裏でいろいろ画策した。当時の複雑な国際的な動きの中で、イギリスがわが国の政局を動かしたのにはイギリスの国際的地位から当然であった。イギリスとアメリカはその後も自国の利益の拡大のため新しい政府の安定・発展のために助力を惜しまなかった。また政府の首脳がきわめて英・米志向であり、英米の文化・国際的地位が高かったのも、わが国の英学は洋学の中で首位の座をますます確固たるものにして行ったのである。



Notes

- 1) 「暗厄利亜」という語は1709年(宝永6)新井白石がローマの宣教師シドッチを前後3回にわたって尋問した結果著わした「西洋紀聞」(上中下三巻)の中にはじめて使われている。
- 2) 日本の英学一〇〇年編集部『日本の英学一〇〇年』明治篇, 研究社, 昭和43年, p. 6.
- 3) 高梨健吉『開国期の英語』三一書房, 昭和42年, p. 14.
- 4) 大槻如電原著, 佐藤栄七増訂『日本洋学編年史』錦正社, 昭和40年, p. 552.
- 5) 前掲『日本洋学編年史』p. 561.
- 6) 前掲『日本洋学編年史』p. 561. この某というのは森山栄之助
- 7) 高梨健吉『英学ことはじめ』角川書店, 昭和40年, p. 91.
- 8) 竹村覚『日本英学発達史』研究社, 昭和8年, pp. 77-8.
- 9) 福沢諭吉『福翁自伝』慶応通信, 昭和32年, p. 105.
- 10) 前掲書, p. 105. 書名を筆者が斜体に, 大文字・小文字は原典のまま。
- 11) 豊田実『日本英学史の研究』千城書房, 昭和38年, p. 128.
- 12) 片山寛『我国に於ける英語教授法の沿革』英語教育叢書, 研究社, 昭和10年, p. 6. (原本は縦書であるが, 便宜上横書にした)
- 13) 博士ウイリヤム・スウキトマン氏著『英語独脩誌』博聞社, 明治22年, p. 442. begun は began の誤りであるが, 原文のまま引用した。
- 14) 前掲『英学ことはじめ』p. 115.
- 15) 近藤晴嘉『ジョセフ=ヒコ』吉川弘文館, 昭和38年, p. 62. 参照
- 16) 同上, p. 63.
- 17) 明治28年4月30日丸善から *The Narrative of a Japanese. What he has seen and the people he has met in the course of the last forty years.* By Joseph Heco, Edited by James Murdoch, M.A. 2 vols. という形で出版された。彦蔵に関する著作はかなり出ている。
- 18) 中川努『日系米人第一号』筑摩書房, 昭和39年, p. 223.
- 19) 高梨前掲『英学ことはじめ』pp. 111-2.
- 20) 前掲『日本洋学編年史』では p. 579. そのほかでも「蕃所取調所」となっている。
- 21) 沼田次郎『洋学伝来の歴史』日本歴史新書増補版, 至文堂, 昭和41年, p. 159.
- 22) 沼田次郎『幕末洋学史』刀江書院, p. 241 では69名であるが, 前掲『日本洋学編年史』p. 578-9には58名の氏名, 身分, 肩書住所までのっている。
- 23) 蘭医伊東玄朴の家塾の名称。その門人録に406名の名が記されている。前掲『日本洋学編年史』p. 750. 参照
- 24) 蘭医緒方洪庵の塾名。門人帳に600名以上の氏名がのっている。前掲『洋学伝来の歴史』p. 152. 参照
- 25) 麻生誠『大学と人材養成』中央公論社, 昭和45年, pp. 34-5.
- 26) 前掲『福翁自伝』pp. 87-8.
- 27) 前掲『日本洋学編年史』p. 639.
- 28) 前掲『洋学伝来の歴史』p. 195.
- 29) 前掲『洋学伝来の歴史』pp. 163-4.
- 30) 桜井役『日本英語教育史稿』敵文館, 昭和11年, p. 28.
- 31) 岡部富雄『大日本教育史』大日本教育振興会, 昭和10年, p. 473. 参照
- 32) 『日本教育資料史』一卷, p. 330.
- 33) 小出広『大日本教育沿革史・後篇・地方教育史』大日本教育振興会, 昭和9年, 「千葉県の教育」p. 15. 参照
- 34) 前掲『福翁自伝』p. 187.
- 35) 鷲山第三郎『明治学院五十年史』明治学院, 昭和2年, p. 91.
- 36) 竹村覚『日本英学発達史』研究社, 昭和8年, p. 84.
- 37) 前掲『明治学院五十年史』p. 22.
- 38) 前掲『開国期の英語』p. 23. 参照
- 39) 阿部隆一編, 村垣淡路守範正著『遣米使節日記』文学社, 昭和18, pp. 99-100.
- 40) 前掲『福翁自伝』p. 113.
- 41) 前掲『開国期の英語』p. 70.
- 42) 石井孝『明治維新の舞台裏』岩波書店, 昭和35年, pp. 21-2. 参照
- 43) 前掲『洋学伝来の歴史』p. 201.
- 44) 深谷昌志『学歴主義の系譜』黎明書房, 昭和44年, p. 36.
- 45) 前掲『福翁自伝』p. 8.
- 46) 同上, p. 200.
- 47) 木村毅『文明開化』至文堂, 昭和29年, p. 136.